

吉田賢抗著「論語一学而一」新釈漢文大系、明治書院 1960年5月25日刊を読む

子曰わく、^{し い}学^{まな}びて^{とき}時に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う、亦^た説^ばし^{から}ず^や。
^{とも}朋^あ有^{えんぼう}り^{きた}遠^ま方^{たの}より^{たの}来^しる、亦^た楽^しか^らず^や。
^{ひと}人^し知^{うら}らず^まして^{くんし}慍^しみ^ず、亦^た君^し子^{んし}な^らず^や。

子曰わく、^{し い}学^{まな}びて^{とき}時に^こ之^{なら}れを^ま習^{よろこ}う、亦^た説^ばし^{から}ず^や。



(通釈)

孔子言う。
 学んだことをいつも繰り返し習っていると
 いつの間にか理解が深まって自分のものとなり、自由に働きを表すようになる。
 これはなんと嬉しいことではないか

(語釈)

- 「子」とは、男子の美称、あるいは通称。ここでは「先生」の意。
- 「学」とは、学問のこと。
 - ・「学」とは、「人のまねをすること」から始まって「なるほどこうであったか」と「^{ごにゆう}悟入」するの意。
 - ・「何を学ぶのか、昔の聖人の教え、詩経と書経を読み、礼と楽を学んで、実践にうつす」のである。
- 「時に」とは、「学ぼうとしてやれるときはいつでも」の意。
 - ・「四六時中、常に」
- 「習う」とは、「繰り返し反復すること」の意。
 - ・「習う」とは、「鳥のしばしば飛ぶ」の意も。
 - ・「反復習熟しているうちに理解が深まり、自分のものとして体得される」
 - ・「習」は前の「学」をうけ、後の「^{たのし}説」に^{たのし}応ずる。
- 「不亦～乎」（また～ならずや）と読む語形。
 - ・「どうだ～ではないか」と強くやわらかく話しかけて相手の同意を促す意味がある。
 - ・「亦」は、詠嘆の意味をもって語調を整え、やわらげる助字。「～もまた」の「亦」ではない。
- 「説」（よろこばし）とは、「悦」と同じ。
 - ・「心中に嬉しく思う」。音は「エツ」。
 - ・「自得悦楽」の意で、「学習」はここまで至らねばならぬ。



とも あ えんぽう きた ま たの
朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや。

(通釈)

このように勉強していると、自然に同学同志で遠くから慕って来るものがあって、学問について話し合いをする。これはなんと楽しいことではないか。

(語釈)

- 「朋～来」とは、「朋友が遠方からやって来ることがある」
 - ・「師を同じうするを朋となし、志を同じうするを友となす」という説も。
 - ・朋友とは、実際には孔子の門人、或いは孔子の学を慕う人たちで、近所の人はもちろん遠くからも慕い集まるの意。
- 「楽」とは、「悦びが心の外にあふれ、容貌にも現れる」
 - ・自分一人の悦びをいう「悦」に対している。
 - ・「門人や学友と共に研究して発明するところの楽しみ」である。



ひとし うら みず ま くんし
人知らずして慍みず、亦た君子ならずや。

(通釈)

修養と学問は自分の力でできても、人との関係は時のめぐり合わせで、必ずしも自分の思うようにはならないが、さて、世人が自分の学徳を認めてくれなくても、不平不満を抱かない人は、なんと学徳の高い立派な人ではないか。

(語釈)

- 「人不知(人知らずして)」とは、「人は世人であるが、ここでは自分を挙げ用いてくれない君主王侯をさす」
 - ・「自分の学徳ができあがっても社会に登用されない」
- 「不慍(うらみず)」とは「心中に少しの不平不満もない」の意。「イキドオル」「イキドオラズ」とも読む説も。
 - ・自分一人の悦びをいう「悦」に対している。
 - ・「門人や学友と共に、研究して発明することの楽しみ」である。
- 「君子」とは「学徳のできあがった人」「人格の高い人」「立派な人」
 - ・元来、位と徳とを兼ねた者の語で、学徳があって民を治める者の称であるが、
 - ・後には、位はなくとも学徳があって人の上に立つ資格のある者を「君子」と称するようになった。
 - ・故に、「君子」は、場合によって「有徳の人」「有位の人」「学者」の三義に使われるが、

現代語では、これに代わるものがない。

・「神工」では内容的にずれがありそうだ。

<余録>

この章は、孔子生涯の履歴ともいうべき学修のことを三段階に分けたものであるが、人間形成に関する一連の発展段階を述べたものである

1. 即ち「第一段階」は「学問は空理空論ではだめで、自らの体験に訴えて、習熟体得しなければならないこと」をいっている。

2. 「第二段階」は「学問は必ず同学者の共同研究によって大きな効果が得られ、

3. 「第三段階」は極めてむずかしい心境。

○孔子は常に泰然として志を動かさず、

・「天を怨(うら)みず、人を尤(とが)めず、～我を知る者はそれ天か」(370 章)といい、深く天命を信じて、自若たるものがあった。

・学問と修徳は、己(おのれ)の任務であり、またやろうとすればできることであるが、自分を知って用いてくれたり、己の真価を知ってくれないことは、人のすることで、自分は如何ともできない。その時代と運命とを合わせ考え、人生究達の理に徹し、命を知り、分に安んじたのが孔子の人生観であった。

・「五十にして天命を知る」(20 章)といい、また論語の最後に「命を知らざれば、以て君子と為すなし」(499 章)とあるのは、まさにこの消息であって、ここに論語の編集に当たって首尾を一貫させた見識を見るのである。



○この第一章は「学問立志」に始まって、学者の俱学俱進の楽しみから、人生窮達の理を達観して、命に安んずるといふ、聖人徳操の境に至る過程を述べたものである。

○孔子一代の自叙伝ということもできる。

○論語は「学」に始まって、「学」に終わる孔子、七十余年の生涯は学問と修徳に努めて倦(う)まざる進歩の跡であるから、この第一章は論語全篇の要約といえよう。

<コメント>

開倫塾が提唱する「学習の3段階理論」(学習を「理解」「定着」「応用」の「3段階」に分け、各々にふさわしい効果の上がる学習方法を具体的に示したもの)(林明夫が考案)は、この「論語」の「第一章」を参考にしたものです。

2022年10月17日(月)